

山谷佑介

「Doors」

2024.1.14(sun) — 3.10(sun)



この度 rin art association は山谷佑介による個展「Doors」を開催いたします。

山谷佑介は 2013 年に自身を取り巻くユースカルチャーを激しく、刹那に記録した自費出版の写真集「Tsugi no yoru e」でデビューして以来、写真家として活動しています。

今展「Doors」は 2018 年に発表以来、継続的に行われているパフォーマンス作品になります。

そのパフォーマンスは自身が 10 代の時から演奏しているドラムが用いて行われ、山谷が独自に開発した装置により、山谷の演奏するスティックがドラムヘッドに接着する振動に合わせてセンサーが反応し、ドラムの前に複数台置かれているカメラのシャッターが切られ、暗闇の中、無数のフラッシュが焚かれながらの撮影行為がライブで行われていきます。

写真のイメージに記録されるのは一心不乱にドラム演奏を行う作者のセルフポートレートと参加する鑑賞者で、それらは傍らに複数台設置されたプリンターから連続的に出力されることで、さらにインタラクティブに場に一体感をもたらします。今回の「Doors」は 2022 年に東京都写真美術館で発表して以来 2 年ぶりとなり、山谷は制作活動を続ける限りこのパフォーマンスを自身が高齢になっても継続したいと語ります。暗闇の中、無数に光るフラッシュは真実を探すまなざしであり、そこにはいつの時代も変わることなく、もがくように真理へのアプローチを行う山谷の姿があり、それを記録(記憶)することで、この行為に新たな時間が加えられていきます。

“お前はあいつが見えるかい。お前はあいつが気になるんだろう。でもね、やつの方じゃお前を見ちゃいないぜ。”

重度のくせ毛というコンプレックスを抱き、休み時間の度にトイレの鏡でヘアスタイルを気にしていた 17 歳の私に友人が投げかけた言葉。見ている自分を見ているのは誰か。

カメラの冷酷さと自分自身の身体の熱量を使って、“見ること”と“見られること”を考えてみたいと思い、2018 年に Doors を始めた。当初、特定の場所にオーディエンスを集めてパフォーマンスを繰り返していた。転換期は 2019 年のヨーロッパツアー。誰も私のことを知らない中でパフォーマンスは、知った場所で見覚えのある顔に囲まれてパフォーマンスを行うよりも、さらに不安と快楽の入り混じった居心地の悪さと居心地の良さの両極端な感覚を私に想起させるような経験になった。唯一確かなことは、私はその風景の中で圧倒的に浮いていた。

横須賀の自宅から高崎のこのギャラリーまで、直線距離で 130km。横浜横須賀道路から第三京浜を經由して環状 8 号線を北上後、関越自動車道を通るルートで 157km。何度も通ったことのある道だけど、一歩立ち止まるとそこに具体的な記憶は、ない。Doors という、やけに大掛かりなカメラ装置を携えながら、そこでどんなまなざしが立ち現れるのか。

私は、横須賀・熊谷・高崎でゲリラパフォーマンスをしながら、目的地・rin art association を目指すことにした。

山谷佑介

パフォーマンスエンジニア：山森文生

山谷佑介

1985 年 新潟生まれ。

主な個展に「KAIKOO」2021 年 Yuka Tsuruno Gallery、「Doors performance tour」2019 年 TIFF FESTIVAL(ワルシャワ)、+DEDE(ベルリン)、FLUC(ヴェイナ)、Umbo(チューリッヒ)、UNSEEN(アムステルダム)、iso(アムステルダム)、New River Studios(ロンドン)、主なグループ展に、「第 14 回恵比寿映像祭」2022 年 東京都写真美術館、「BEYOND 2020」2020 年 KunstENhuis(アムステルダム)、amana Gallery、Galerie Nicolas Deman(パリ)、「VOCA 展 2021」2021 年 上野の森美術館など。最新の写真集・モノグラフに、温泉を題材とした『ONSEN I』2023 年 flotsam books など。

[水-日] 11:00-19:00 [月-火] 休廊

contact

rin art association

370-0044 群馬県高崎市岩押町 5-24

t: 0273-87-0195 e: contact@rinartassociation w: http://rinartassociation.com